

# 子どもの歯を 守ろう!

むし歯をつくらないためにも、  
乳歯のうちから予防ケアが大切です。  
子どもの歯について、  
いっしょに考えましょう!



## 乳歯は永久歯のナビ

「子どもは小さな大人ではない」と言われているのと同じように、乳歯は永久歯を小さくしたものではありません。乳歯には、後から生えてくる永久歯のナビゲーターという大役があるのです。

例えば、むし歯で乳歯を失うと、その場所は隣の歯が倒れてきて、永久歯の生える場所がなくなってしまう。すると、永久歯の生えるスペースがないために、歯並びが悪くなってしまうのです。

また、お話ができるようになってからむし歯やケガで前歯を失



資料提供  
日本小児歯科学会認定  
専門医指導医  
日本小児歯科学会広報委員会  
兼元妙子

ってしまったとしたら、正確な発音ができなくなる心配があります。お乳を吸うことは、生まれながらの本能的なものです。食べることは歯が生えてからのお勉強です。乳歯が、むし歯などで痛くて噛めないようだったら、それは今、食育の面で話題となっている「噛めない子、噛まない子、飲み込めない子」の予備軍です。無限大の可能性を含んでいる子どもの成長や発育にとって、大切な物は「食」であり、言語に携わる「口」であり、そして「歯」です。歯が食育に果たす役割は、想像する以上にきわめて大きいことを、ぜひ覚えておいてください。乳歯は、大人の歯が生える準備が始まるとともに、乳歯の根が少しずつなくなると、最後にはポロっと抜けてしまいます。永久歯とのバトンタッチは5〜6歳から始まります。長くて12年ほどの命と言われる乳歯ですが、「たかが乳歯されど乳歯」なのです。日本歯科医師会は、80歳で20本の歯を残す「8020運動」に力を入れていきます。ぜひ、乳歯のころから歯の大切さをしっかりと教えてあげてほしいものですね。

## 予防ケアにつながる かかりつけ小児歯科をもとに

鶴見大学歯学部小児歯科学講座 教授 朝田芳信

子どもを取り巻く健康、生活、安全面といった多くの問題点が指摘されている現代。とくに子どもの健康にとつては、環境の変化が影響して、重要な転換点とも言われています。

そんな中、日本小児歯科学会では、歯・口の健康づくりを通じて、子どもの健康増進に働きかけています。むし歯の減少と軽症化も急速に進んできました。また、歯に対する考えも、「むし歯を治療しよう」ではなく、「むし歯をつくらない」が定着。予防歯科医療の重要性が目ざされ、むし歯を予防するための生活習慣などが呼びかけられています。子どもが持つ歯と口の動きが十分に活かされ、心身が健康に育つよう「成育」を支援していく。それがこれからの小児歯科医の担うべき役割といえるでしょう。むし歯になつたら歯科医へ行くのではなく、歯と口が健康に育つように定期的に予防ケアとして歯医者に行く時代です。

子どもの歯については、むし歯だけでなく、歯の成長段階を含め幅広い専門知識が必要となります。それを受け、平成18年からは厚生労働省の認可のもと、「小児歯科専門医」が認められるようになりました。現在、約1,200名の小児歯科専門医が地域における小児歯科医療の核となり、日々、口腔保健活動に従事しています。

- ① 小児歯科専門医が増えること、担当医師の医療背景を患者に的確に伝えられ、信頼される医療が提供可能に
- ② 小児歯科専門医の質の向上
- ③ セカンドオピニオン要求の助けに

といったメリットが期待できます。また、地域行政や教育の現場といたって他の専門分野との連携も非常に重要です。地域社会という単位で対応していかなければ、子どもの健康を守ることはできません。日頃から医師、看護師、保育士、養護教諭との関わりの中で、子どもの健康に対する問題点を共有し、解決策を見出し、必要があれば、お母さん方にも、小児歯科専門医の存在と役割を理解していただき、ともにお子さんの歯と健康を守っていただければと願っています。



●朝田芳信  
一般社団法人日本小児歯科学会 理事長、鶴見大学歯学部附属病院 副院長、日本歯科学会 連携会員、日本歯科学会 協議会常務理事、日本外傷歯科学会 理事、厚生労働省保険医療専門審査員などを務め多数から子どもの歯を守る活動をしている。